

完了の助動詞は“be(eg.)”か“have(eg.)”か。

—英語・オランダ語・デンマーク語・スウェーデン語の場合—

藪 下 紘 一

プロロゴス

上記4つの言語のうちもっとも変化のはやい言語は英語で、次にスウェーデン語。そして昔からそう変わっていないのがオランダ語とデンマーク語である。もちろん完了の助動詞の一本化という点についてである。それが良いとか悪いとかの論ではない。簡単に4つの言語について現状を書き、本論では歴史的なことに触れていきたい。

1. 現代英語では、知っての通り、完了の助動詞は“have”だが、少し前までは、“be”も使っていた事がわかる。そしてもしかして幾つかの方言では今日でも、使われていそうだが、これは調べなかった。

2. オランダ語では昔から“hebben”と“zijn”の使い分けがあって、今日でもそれが続いている。ドイツ語に極めて近い、もちろん完全に同じという事ではなく、幾つかの違いをくわしく調べてみる必要があるが、次回にまわしたい。

3. デンマーク語でも完了時称で“have”と“være”の使い分けがあり、これ又オランダ語同様ドイツ語に非常に近い。その異同を調べてみるのは興味深いだが、ここではしない。

4. スウェーデン語では現在完了形は“have”+スピーヌムだが、少し前までは“vara”+スピーヌムもあった。ただしここでも英語同様haveで一本化されるすう勢はくつがえせない。

完了の助動詞は“be(eg.)”か“have(eg.)”か(数下)

本 論

1. 英 語

① O.E. では過去時制は過去のあらゆる時を表わすことができた。然し

a) beon (wesan) + 自動詞の P.P.

例：ƿā wāerom cumen of Hilbernia.

<They had come from Ireland.>

b) habben (hæfde) + 他動詞の P.P.

例：Ic habbe pā bōk āwritene.

<I have written the book.>

もあった、又、

……gefaren hæfden……

といった例もある。(gefaren は自動詞の p.p.)

② a) O.E. のはやい時期には、have + obj. + p.p. の p.p. は形容詞扱いで obj. と関連づけられ、性・数・格で一致した。

例：Ic hæbbe hine gebundenne.

<I have him in the state of being bound>

b) 8世紀までに語順がかわって、

have + p.p. + obj.

となり p.p. は obj. とではなくて have と関連づけられるようになった。

③ O.E., M.E. で“have”の方は、他動詞と、そして多くの自動詞と共に使われたが、“be”の方は変移動詞 (arrive, come, move……) や静止をあらわす動詞 (lie, stand…) と共に使われた。EMod.E でも変移動詞はまだ be と共起した。

例：a) Wē habba ð oft gesæd.

<我々はしばしば言った。>

完了の助動詞は “be(eg.)” か “have(eg.)” か (載下)

b) Nū is sē dæg cumen.

〈今その日が来た。〉

④ “have” は本動詞としての場合は別として、完了の助動詞としても発達したが、元々 possess, hold の意味に由来している。O.E. の期間でもその推移は見られる。

例： a) ic hæbbe pone fisc gefangene.

〈I have caught the fish.〉

b) he hæfþ mann geworhtne.

〈He has created man.〉

⑤ 過去完了の場合も O.E. で、

a) habban の過去形 + 他動詞の p.p.

b) wesan の過去形 + 自動詞の p.p.

これはあまり普通という訳でなく過去で代用されていた。M.E. 以降では a) が主流で、b) は変移動詞に限られた。しかし EMod.E. でも過去完了は過去で表されることがなかったようだ。

例： þā hit wæs æfen geworden.

〈when it had become evening.〉

⑥ 運動と静止の動詞の時 habbe(n). have をつけて完了形にすることが稀にある。力点が動詞のあらわす行為の方に置かれ、その行為の完結した状態の方にはかかっていない場合である。

例： He took his wyf to kepe, whan he is goon. (Chaucer)

⑦ i : “have” の事。既に初期中英語で一連の自動詞の現在完了が “have” で作られ、その後数世紀の間に多くの動詞で “be” の諸形による現在完了形のほかに “have” を用いる形が出て来て、Mod.E の間に “be” の諸形の使用が次第にすたれた。

ii : 現在完了が現在との関連という中心的意味を表わす現在の英語の慣用が確立するのは16世紀以後のことだそう。

完了の助動詞は“be(eg.)”か“have(eg.)”か(藪下)

上記の事柄は以下の文献によっている。

- 1 厨川文夫：『古代英語』，研究社，S. 15
- 2 H. スウィート：Anglo-Saxon Primer，千城出版，S. 43
- 3 中尾俊夫：『英語発達史』篠崎書林，S. 54
- 4 ヘルベルト・コツイオル：『英語史入門』南雲堂 1977
- 5 中島文雄：『英語発達史』，岩波全書，1970²³
- 6 K.Brunner：『中世英語文法概説』，研究社，1966.

2. オランダ語

古い時代からの記述は筆者の文献不足で調べがつかなかった。ただ、塩谷の『オランダ語入門』の第1講に地理的、歴史的な簡けつな記述がある。

現代オランダ語の完了の助動詞は2つで，hebben と zijn であり，それと共に使われる本動詞の性質によって使い分けられる。

①. hebben をとる動詞

a) 能動態での他動詞

例：i. Ik heb examen gedaan. (het examen is voorbij.)

<私は試験を終えた。>

ii. Ik heb mijn werk afgemaakt.

<私は私の仕事を仕上げた。>

iii. Moder heeft mij om zes uur gewekt.

<母は私を6時に起こした。>

b) 不人称動詞

Het heeft geregend. (雨が降った。)

c) 再帰動詞

例：i. Ik was me. (私は自分の《身体，顔》を洗う。)

完了の助動詞は“be(eg.)”か“have(eg.)”か(載下)

(再帰代名詞に3格・4格の区分をしていない。そして主格と目的格の2つしかなく人称代名詞を充てる場合は従って目的格の語形を使う。)

ii. Hij heeft zich gewassen.

〈彼は自分の身体を洗った。〉(完了の場合)

d) 「ある状態にある」又は「ある動作をする」ことを意味する場合の自動詞。

例：i. Ik heb van U gedroomd.

〈私はあなたの夢を見た。〉

ii. Het vee heeft in de weide gegraasd.

〈家畜は牧場で草を食べた。〉

iii. Zij heeft aan een borstkwaal gesukkeld.

〈彼女は胸の病でブラブラしていた。〉

②. zijn をとる動詞

a) 場所の移動や状態の変化を表わす自動詞。

i. De appel is van de boom gevallen.

〈そのリンゴはその木から落ちた。〉

ii. De jonge is van den trap gevallen.

〈その少年は階段から落ちた。〉

iii. De burgmeester is verleden week gestorven.

〈市長は先週死んだ。〉

b) 方向・目的がきまっている場合

例：Zij is naar huis gewandeld.

〈彼女は家へ歩いていった。〉

注：Ik heb eentijd gewandeld. 〈私はしばらく散歩した。〉

完了の助動詞は“be(eg.)”か“have(eg.)”か(藪下)

③. 次の動詞は Zijn を完了の助動詞として用いる。

gaan, komen, zijn, blijven, naderen.

例： i . Hij is naar Indonesie gegaan.

〈彼はインドネシアへ行った。〉

ii . Zij zijn daar geweest. 〈彼等はそこにいた。〉

iii. Ik ben thuis gebleven. 〈私は家に残っていた。〉

④. 両方の使い方があって、それぞれ意味が違う場合。

i .a.Hij heeft zijn plicht vergeten.

〈彼は彼の義務を忘れた。義務を果すのを忘れた。〉

b.Ik ben al die namen weer vergeten.

〈私はその名前を再び忘れた。忘れて記憶にない。知らない。〉

ii .a.Ik heb hem daar dikwijls ontmoet.

〈私は彼にそこでたびたび会った。〉

b.Ik ben geen soldat ontmoet.

〈私は一人の兵士にも会わなかった。〉

ii .a. は行為に重点があり、 ii .b. は結果に重点がおかれている。

上の項は下記の文献によるものである。

朝倉：『オランダ語四週間』，大字書林，1971

塩谷：『オランダ語文法入門』， “ ” ， 1979

3. デンマーク語

①古ノルド語では vera (be) + 運動を表わす動詞の過去分詞で完了を形成し、他の過去分詞と have (bave) とで完了が形成された。

それを引きついだのが、古代デンマーク語、古代スウェーデン、古代

完了の助動詞は “be(eg.)” か “have(eg.)” か (蔽下)

ノルウェー語そして古代アイスランド語で、それに少々の変化がともな
って現代デンマーク語の完了表現となっている。

一番古い所はこの項のはじめに出したが、歴史的な中間段階をはしよ
って、現代デンマーク語の完了が形成される。

② have+p.p.

a. すべての他動詞

Har du læst bogen? <あなたは本を読み終えましたか。>

Jeg has glempt min mappe i toget.

<私は私の書類カバンを列車の中に忘れて来てしまった。>

b. 動作を意味する自動詞

Han har arbeidet strongt. <彼は身を粉にして働いた。>

Hur længe har du læst dansk?

<Wie lange studierst du schon Danish?>

c. 継続的な状態を意味する自動詞

Han har staet op hele tiden.

<彼はその間立ちどうしだった。>

Vi har boet her i byn, siden vi blev f•dt.

<私達はうまれてからずっとこの町に住んでいます。>

d. være

Har du været i Paris?

<パリへ行ったことがありますか。>

Det har været godt veir denne uge.

<今週はいい天気でした。>

③ være を使う動詞

a. 空間的、時間的に移行する意味の動詞。

Bussen er gaet. <バスは出てしまった。>

Hunden er løbet bort. <その犬は逃げてしまった。>

完了の助動詞は “be(eg.)” か “have(eg.)” か (載下)

b. blive

Endelig er de blevet juleaften.

〈とうとうクリスマスイヴになった。〉

- ④ デンマーク語の完了形は過去に起こり今も続いている事柄をあらわす。この点は現代英語やスウェーデン語と同様である。

Jeg boede her i tre år.

〈Ich wohne schon drei Jahre hier.〉

Jeg har boet her tre år.

〈Ich wohne schon drei Jahre hier.〉

- ⑤ 運動を表わす総ての動詞は、行為に重きを置くか状況に重きを置くかによって “har” か “er” を助動詞として使い分ける。

行 為

状 況

Han har løbt 5 km.

Hunden er løbet væk.

〈彼は5キロ走った。〉

〈その犬は走り去った。〉

Jag har tit gaet til Valby.

Han er gaet. (Han er væk.)

〈私はしばしばヴァルビューへ行った。〉

〈彼は行ってしまった。〉 〈ここにはいない。〉

Han har fløjet til Paris mange gange. vs.

〈彼は何んでもパリへ飛んだ。〉

Han er fløjet til Paris. (Han er icke her nu.)

〈彼はパリへ飛んでいった。(今ここにはいない)〉

この項は下記の文献からの情報によっている。

E.V.Gordon : An Introduction to OLD NORSE, Oxford, 1957

岡田 (他) : 現代デンマーク語入門, 大学書林, 1984

H.A.Koefoed : DANISIH, London, 1968

Hans Fix-Bonner : Kompakt Grammatik Dinisch, Kleit, 1990

P.Skautrup : Det danske sprogs historie 4 Bde. Gyldendal, 1968~1970

完了の助動詞は “be(eg.)” か “have(eg.)” か (載下)

4. スウェーデン語

古スウェーデン語では完了は、他のゲルマン系の言語同様, hava (havir, hafði) とその文の本動詞の完了分詞 (スピーヌム) による書きかえによって形成される。

(hava + 本動詞のスピーヌス)

- a. Stæin haviR vettan. (Er hat den stein errichtet)
- b. Han havir sagt, at…(Er hat gesagt, daB…)
- c. sa wel som han haffver giffuet the Hebreer……(彼 (=神) がヘブライ人にヘブライ語を……人に……語を与えたように……)

2. 場所の移動や状態の変化を示す自動詞の vara と本動詞のスピーヌムによる書きかえが行われる。vara + 本動詞のスピーヌム, (尚スピーヌムは元来の過去分詞の働きの一部が独立したものである。)

a. Sasom (Christus är kommen til ath frelsa alla,……(キリストはすべての者を救うためにおいでになったのであるから)

b. Tin brodher är kommen, (Din brudr har kommit.)

c. Han är kommen. (=Er ist jetzt hier) → Han har kommit.)

(vara を使う表現は結果として生じる状態を示す)

「have を使った場合変化, 行為, でき事をよりきわ立たせる。」と

Wessen は書いている。

d. Han har kommit. (Er is gerade gekommen.)

e. Vi är komma hit i ett viktigt ärende.

Vi har kommit i ett viktigt ärende.

<私達はある重要な件でここへ来ました。>

3. Han har gått—Han är gangen. (Er ist gegangen.)

自動詞の場合過去の複合時称を形成する為には vara と同様 hava

完了の助動詞は “be(eg.)” か “have(eg.)” か (載下)

も使用される。

a. Han är nyss utgangen. <彼はたった今出かけた。>

b. Snön var smält. <雪がとけてしまった。なかった。>

この表現は、中部・北部スウェーデン語においてよりは南部スウェーデン語で多く使われた。

普通は

ā. Han har nyss gat ut.

ḃ. Snön hade redan smält. である。

4. 口語でいつ頃からこの様な変化が生じたのかは不勉強にしてわからなかったが, Gustav Wasas Bibel (1540~41) に Tin brodher ar kommin. (現代語では Din broder har kommit.) という1917年の聖書翻訳で古い用法をそのまま使っている。権威・古さ・雅び・重要さを読者に与えているようだ。

古スウェーデン語では、助動詞 vara は、これら運動をあらわす自動詞と共に完了形を形成し、今日の標準語においても多く用いられた。

この項は下記の文献からの情報に基づいている。

E.Wessen : SCHWEDISCHE SPRACHGESCHICHTE, 3 Bde. Berlin. 1970

: Gustav Wasas Bibel, 1971

E.V.Gordon : An Introduction to Old Norse, Oxford 1968²

E.Wessén (菅原訳) : 「北欧の言語」, 東海大学出版会1973

Lärare vid IES. sth, univ. : deskriptiv svenrk gr.ammantik 1979

H.Lindholm : Svensk grammatik, KVs, Förlag, 1981

完了の助動詞は“be(eg.)”か“have(eg.)”か(藪下)

エピロゴス

本稿は新しい事が明らかになったり、新発見をするものではない。ただ整理の仕方がわかり易ければ良いが、と思っているだけだ。

ドイツ語を教えている最中にそれぞれ親縁関係にある言語との関連にも話をおよぼすと学生達は「ヘー！」といった顔をしてきいている。

ドイツ国内の Landeskunde もさることながら、兄弟にあたる英語ではこうだ、スウェーデン語ではこうだと言うのは、単語や表現の仕方の異同を知って学習した事の定着率を少しでも高めたい為だ。

一を教えるに百知を知っている云々、という言葉があるが、それにならいたいものだ。